
元人間。元神。今？

ある日のあひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元人間。元神。今？

【Nコード】

N0931Z

【作者名】

ある日のおひる

【あらすじ】

ある日、高校生の人璃心軌は、ついていた。ラッキーだった。だが下校途中に現れた、怪しげな男に君は、もうすぐ死んでしまうと言われる。それは、余りに、理不尽な、必然だった。

一神話 前書き

俺、元、人間。

元、神。

今、？

これが、僕、人^{ひとり}璃^{しん}心^き軌。

現在、？ と言う事になるだろう。？。はてな。クエスチョン。
意味不明。理解不可。不可解。摩訶不思議。僕だつてそうだ。どう
やら、今の僕は、人間では、無いらしい。いや、人間だったが正しいか。まあ、人間で無い事に変わりは、無い。

僕は、人間から、神になり。神から？になった。はてなと言うのは、名が無いからだ。いや、本当は、世界中血眼になって探せば、見つかるかもしれないが、そこまでする気には、ならない。

名。元、人璃心軌。今でも、それを名乗っていいのかは、分からない。これは人間だった頃の名のだから。でも、使わせて貰っている。別にこの名前が気にいっていた訳じゃないが、この名前を使つて、16年。今から、新たに付けるのもアレだから……

そう、僕は、一カ月前まで、人間だった。それが、一生続くものだと思っていた。

だが、運命の悪戯か。偶然か。必然か。奇跡か。分からないが、僕の意味とは、関係無く、僕は『神』になった。

二神話 付いている

高校に入って二回目の春と夏の間。その日は、春と言うには、暑く。夏と言うには涼しいそんな日だ。五月中旬の事。学校帰り。下校途中。僕は、僕は独り。

今は、学校近くにある書店で立ち読みをしている、漫画、小説、ライトノベル。サブカルチャー。本は好きだ。買うつもりの無い立ち読み。店員には、申し訳ないが、たまに買うので、今日のところは見逃して欲しい。などと、自分勝手の言い訳をし、手ぶらで書店を後にする。いや、手ぶらでは無かった。学校の鞆と、『傘』それが僕の手には握られている。

書店を出ると、辺りは、暗くなり始め、僕の視野に入る人々は、小走りで走る人が多い——雨が降っている。天気予報じゃ、今日の朝見た、テレビの的予報の降水確率は、0%。それで傘を持っていない人も多いのだ。でも、何故か、僕は、『傘』を持っていた。ラッキーだ。付いている。なんとなく、意識をしないで。無意識で。何故か今日家から持ってきた、『傘』、ソレを差し、僕は、近くのバス停へ向かう。普段は、自転車で登下校をしているが、今日は、『たまたま』バスで登下校だ。理由は、得に無い。ただなんとなく。そう、ただそれだけだ。

バスに乗り、家の近くのバス停まで向かう。雨が降り出した事もあり、人がいつもよりも多く乗っていたが、運よく僕は、開いている席に、座る事が出来た。

今日は、妙に付いている、朝、天気予報の次にやっていた正座占いが12位だったがやっぱり関係の無いことだ。僕は、占いなど信じてはいない。あんなモノを放送するんだったら、他に放送しなければいけない事が在るのではないだろうか、国によっては、本気で

占いを信じている人が多く居る国が存在すると聞くが、全く、どうかしているんじゃないかと僕は、思う。

そんな事を考えながら、バスに揺られること、15分くらいだろうか、一番家に近い、バス停で僕は降りた。

此処で降りたのは、僕独りだけ、辺りは、もうかなり暗い。僕の家までの道は、余り人通りが多いとは、言えない。家もそれ程多くは無い。まあ、手っ取り早く言うと薄気味悪い道だ。一定の距離ごとに在る、電柱。その上には、今にも消えかけそうな、ライトが付いて、弱い光で暗い道を照らしている。その光に群がる、虫達もこの気味悪さに一役買っているだろう。

だが、僕にとっては、何でも無い通いなれた道だ。恐怖など無い。子供じゃあるまいし、ましてや、僕は、幽霊や、魂なんて、非科学的な物を信じてなどいないのだから。

傘を差し、歩く僕。勿論足音は、僕独りだけ。他の音といったら、雨音ただそれだけ。ここまで別に何も変では無かった。よく在る日常の風景。

だが、いつもと違う事が一つある。いや、見つけた。違うと言うより、変だ。電柱の下に誰かが立っている。いや、ただ立っているなら、何も変では無いだろうが、明らかにコイツは、変だ。

電柱の上に在るおぼろげなライトの光に照らされているその『男』の外見は、Gパンに、サンダル、半袖Tシャツ。そして、腰くらいにまで伸びている長い長髪、色は、恐らく染めていない黒、髪を頭の後ろで、男に対して余り使いたくは無いが、ポニーテールにしているらしい。歳は、分からないが、若そうだ。若いと言っても、20代中盤くらいだろうか？確かに、外見からして、余り普通とは、言えそうにないが、そんな事よりも、一番気になったのは、この雨の中、傘を差していない状態で、そこに平然の立ち、僕の事をじっと見ている事だった。

三神話 嫌々傘

僕は、立ち止まった。男との距離約、十メートル。

傘を差す俺。傘を差さずまるで雨をシャワーのように浴びて、僕を見つめる男。うつすら笑っているようにも見てとれる。

なんだ、コイツは！？ 明らかに異常だ。だが、僕の家はコイツの先だから僕は、止まってしまった足を一步踏み出す。

動き出す僕。静止している男。視線が気になるが、構わず僕は歩いたが、踏み出して5歩のこと、

「雨が降っているね」

男がいきなり、言葉を放つ。いや、言葉には、僕とコイツしか居ない、だとすると、コイツは僕に話しかけたのだ。いきなり——確かに、僕が話しかけられる事を予想していなかったからいきなりになるだろうが、その口調は、まるで、お隣さんの世間話、そんな感じだった。

続けて男は、

「君の傘に入れて貰えるかな」

と、言つて、俺の元へと、今まで動かなかった体を、動かす。

俺には、こんな奴、男と、相合傘などする趣味など無い。勿論御免だ。それに、それだけずぶ濡れなら入る必要もないだろ。はつきり言つて不快だ。むその表情は、僕と顔に出ていただろ。この不可解な状態で全くもって冷静で居られる程、僕は人間が出来ていない。これから先、出来上がる事も無いだろ。

そんな僕の事をお構いなしに、男は、僕に近づき頭をかがめ、僕の傘へと入つて来る。

「よつと」

「えっ」

驚きの7割、呆れが3割と言つたところか、僕は、声を漏らす。

僕の返答を聞きもせず、傘に入つて来た男。今まで、これ程図々しい奴が、俺の人生の中に居ただろうか？

そして、俺の表情を窺うように、顔を見る男。そんな顔を見たくも無いので、下に視線を逸らすと、首には、十字架のネックレス。右手には、数珠のアクセサリーがしてある事に気付いた。全く、西洋が好きなのか、東洋が好きなのか、少し疑問に思いはしたが、今の若者は、そんな関係無いかと、自分と方がどう見ても若いがそんな事を思った。

「やっぱり、君か——どうだい、ついてるかい？」

何の脈絡の無い文。意味が分からない。

「そう、困惑しないでくれよ、君は、ついている筈だよ」

気味が悪い、知らない男にいきなり、自分の傘に入られ、顔を近づけられれば、9割9分7厘位の人は、そう思うだろう。気味が悪いとは思わなくとも、それに近い感情は抱く筈だ。ここであえて、三厘残したのは、普通じゃない奴も世の中には居るからだ、コイツのように。

「すみません、急ぐので」

そう言つて、男から離れて、少し数歩、歩いたところで男が、

「あらら、いいのかい、君——死んじゃうよ」

さっきまでの声とはまるで違う、それは僕を憐れむような、そんな声だった。

四神話 蹴り

「死ぬ？」

僕は、不本意だったが、立ち止まり、聞き返した。雨の音が煩かったが、確かにコイツは、僕が死ぬと言った。

男は、

「いや、ゴメン、間違えたよ、『死んじゃう』じゃ無くて、『消えちゃう』が正しかったよ」

その言葉に、「ゴメン」の誠意など一切感じられない。

「馬鹿らしい、貴方に何が分かるんですか？ 僕は帰りますよ」

立ち去ろうとしたが、男は、それを止めるかのように、

「すまないね、気を悪くしたかな？ おじさんは、口が悪くてね、でも良いのかい帰っても？」

言葉は、冗談のように聞こえるが、何故か、説得力のある声。僕の知らない事を知っているようなそんな声だ。

何故か、僕は、立ち止まり、男の方を振り向いた。そうしたかった訳じゃないが、そうした方が良いとまるで体が言っているようだ。

「話を聞いてくれる気になったのかい？ その判断は、正しい。さすがだね、君は、ついているよ」

「少しだけ、聞きます。僕が『死ぬ』ってどういう意味ですか？」

「死ぬんじゃない、消えるんだ。君は、幸か不幸か、『ソレ』に当たってしまったんだよ」

全く理解に苦しむな、コイツと話していると。消えるんだったら不幸に決まっているじゃないか。

「まあ、信じられないだろうね、信じたくもないだろう？」

そりゃそうだ、初対面に遭った奴に、貴方は消えます、なんて言われて、信じる奴なんて、頭のネジどころか、頭の回路ごと、いか

れているとしか、考えられない。

「うーん、そうだな。君にこの話を聞いてもらうには、まず君の今の状況を知って貰うのが良いだろう。うん。そうしよう」

そう言い終わった瞬間、男が、消えた。いや、違う、消えたんじゃない、移動したのだ、僕のすぐ横に、

「えっ!？」

気付いた時には、僕の左に男が居た。居るんじゃない、構えている、何を？ 脚をだ。速い。普通の人間のスピードでは無い事ぐらいは、理解出来た。

男が、僕の左脇腹に向かって、物凄い蹴りを繰り出そうとしている。その風圧で雨は、今その足から、逃げている。避けている。まるで、雨さえもその蹴りを恐れるかのように。

僕は、動いていない。いや体が反応出来ない。それ程男は、速い。脚が脇腹へと

迫る。襲いかかる——だが、脇腹に当たると思った脚は、僕の体には当たらなかった。いや触れられなかった？ 脚は、僕の体に当たる瞬間、一瞬のこと、静止したかのように見えた、いや、まるで、見えない壁にぶつかったかのように。

男は、脚を上げた状態で静止している。右脚のGパン脛の所にさつきまで無かった、穴が開いている。

「やっぱり、こんな蹴りじゃ、傷一つ付かないか、流石だね」

笑う男。嬉しそうに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0931z/>

元人間。元神。今？

2011年12月3日20時10分発行